

予報文案

令和7年第1回一都三県サバ漁海況検討会
令和7年漁期サバたもすくい漁、棒受網漁の見込み

令和7年1月9・10日

参加機関：東京都島しょ農林水産総合センター、神奈川県水産技術センター、静岡県水産・海洋技術研究所、千葉県水産総合研究センター

協力機関：水産研究・教育機構水産資源研究所、
漁業情報サービスセンター、
宮城県水産技術総合センター

1 予測

(1) 海況

【予測（2025年1～6月）】

黒潮大蛇行が継続し、A型基調で推移する。

蛇行北上部は概ね伊豆諸島海域の西側に位置し、伊豆諸島北部海域（大島～利島及びひょうたん瀬）、三宅島及び銭洲海域はいずれも概ね暖水に覆われる。沿岸水温はいずれの海域も「やや高め」～「極めて高め」で推移する。房総沖では、黒潮は接岸傾向で推移し、沿岸水温は「平年並」～「やや高め」で推移する。

1～2月の漁場水温は、伊豆諸島北部海域では、1月が18～21℃、2月が19～20℃で推移する。三宅島及び銭洲海域では、1月が20～21℃、2月が20℃前後で推移する。

【説明】

1月8日現在、黒潮は遠州灘沖をS字状に北上した後に東進し、銭洲海域や三宅島周辺を通過後、北東に向きを変え房総沖を流れている。水温は、伊豆諸島北部海域は20～21℃、三宅島周辺及び銭洲海域は21℃になっている。

黒潮は期間を通じてA型で推移し、蛇行最南下部から御前埼付近まで北上した後に東進し、三宅島周辺で向きを北東に変え、房総沖を流れる。また、御前埼はるか沖から北西へ向かい、大王埼周辺まで達した後に向きを東へ変え、三宅島周辺で向きを北東に変え房総沖を流れる時もある。いずれの場合も、これらの海域は黒潮からの暖水に覆われやすくなり、漁場水温は上昇する。房総沖では概ね接岸傾向で推移し、離岸は一時的である。また、黒潮からの暖水に覆われやすい。

なお、1月～2月の水温は水産研究・教育機構水産資源研究所の海況予測システム（FRA-ROMS II）等を参照した。

【海況予測の考え方】

黒潮流路については、12月の長期海況予報を参考にする。

2か月後までの黒潮流路及び水温は、FRA-ROMSⅡ等を参考にする。ただし、現況を優先する。

大蛇行型の場合

- ・漁期中はA型流路（A型は継続期間が長い）
- ・伊豆諸島海域は、水温高めで推移

非大蛇行型の場合

- ・西の小蛇行の位置と規模を確認する。（都井岬に蛇行部があれば、2～3か月後に伊豆諸島海域に到達する）。
- ・4月以降は長期予報のとおり。
- ・N型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」～「平年並」、三宅島付近は「平年並」～「高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」。
- ・B型流路の時、伊豆諸島北部海域は「高め」～「極めて高め」、三宅島付近は「高め」～「極めて高め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「やや接岸」。
- ・C型流路の時、伊豆諸島北部海域は「低め」で暖水波及時に一時的に「高め」、三宅島付近は「低め」。野島沖の黒潮離岸距離は「平年並」～「著しく離岸」だが、伊豆諸島の東をS字に北上する場合には「接岸」。

(2) 漁況

①マサバ

【予測 (2025 年 1～6 月)】

(ア) 来遊量・漁獲量

低調であった前年を下回る。

(イ) 漁期・漁場

初漁は 2 月下旬以降に伊豆諸島北部海域（大島千波・利島周辺）となり、漁期を通して主漁場となる。

(ウ) 魚体

27～30 cm 主体の 3 歳魚が主体となり、4 歳以上（31～35 cm）が混じる。※年齢は年初に加齢し 2025 年時で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

マサバ推定来遊資源量・漁獲量

2025 年 1～6 月の伊豆諸島海域におけるマサバ来遊量及び漁獲量は、2024 年を下回る見込みである。これは、水産研究・教育機構が公表するマサバ太平洋系群の資源量予測及び近年の海洋環境を踏まえて導き出した結果である。

まず、同機構によれば、当系群の資源量（暫定値）は 2018 年をピークに減少傾向を示している。伊豆諸島海域に来遊するのは成熟した親魚が中心となるが、卓越的な加入があった 2013 年級群以降は成長遅延（由上ら「令和 3 (2021) 年度マサバ太平洋系群の資源評価」）が認められることから、成熟率を 3 歳魚で 30% 及び 4 歳以上で 100% と仮定して親魚量を推定し、2025 年 1 月時点の親魚量は 235 千トンと予測した（表 1）。これは低調であった前年並である。

次に、海洋環境については、黒潮続流が北偏・沿岸寄りに流れる状態が 2022 年以降継続しており、2025 年 1 月中旬もこの状況が続くと予測されている（2024 年第 4 回東北海区海況予報）。加えて、2024 年 12 月時点の東北海域における緯度経度 5 分ごとで集計した漁場水温の平均は 20.2℃（前年：18.4℃、2019～2023 年平均：16.1℃）と前年を上回る高温である。このことから、海洋環境は前年以上に悪化しており、親魚の南下は前年よりも困難であると判断されることから、来遊量は前年を下回ると考えられる。

このような状況下、2022 年以降の黒潮続流の北偏によって親魚量に対する漁獲割合（漁獲量/親魚量）は極めて低い状態が続いており、漁獲努力量がほとんど変わっていないことを考慮すると、この低い漁獲割合は海洋環境の変化に伴う来遊量の減少を反映した結果である。特に 2024 年は最低値を記録した。2025 年の漁獲割合を仮に過去 5 年（2020～2024 年）の平均で試算すると、漁獲量は 876 トンとなり、2024 年を上回る見込みである（表 1）。一方で、過去最低値を記録した 2024 年の漁獲割合で試算した場合、漁獲量は 356 トンとなり、2024 年並の水準になる。しかし、これらの試算は楽観的な予測に過ぎず、実際には来遊量が前年を下回ると考えられるとともに、漁獲努力量が前年同様であるため、漁獲量は前年を下回ると予測する。

表1 マサバ太平洋系群の親魚量及び伊豆諸島海域におけるマサバ漁獲量と2025年予測

年	親魚量 (千トン)	漁獲量 (トン)	漁獲割合 (%)	黒潮流路				
				1月	2月	3月	4月	5月
2011	236	2,158	0.91%	NN	NB	B CW	C DW	N BC
2012	383	2,145	0.56%	NN	NB	C C	CD N	B C
2013	379	2,325	0.61%	CW ND	D DN	N N	N NB	B BC
2014	535	2,781	0.52%	C C	C C	C WB	C BC	N N
2015	454	2,111	0.46%	N BC	C W	WB C	C C	C CD
2016	489	4,053	0.83%	C CN	N N	N NB	BC C	C C
2017	837	1,643	0.20%	B B C	C C W	B C C	C C C	C D W
2018	778	2,874	0.37%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2019	766	3,202	0.42%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2020	653	4,189	0.64%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2021	611	3,131	0.51%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2022	417	1,449	0.35%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2023	269	572	0.21%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2024	196	297	0.15%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2025予測1	235	876	0.37%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A
2025予測2	235	356	0.15%	A A A	A A A	A A A	A A A	A A A

※予測1：2025年の漁獲割合を過去5ヵ年平均とした場合の試算値

予測2：2025年の漁獲割合を過去最低値だった2024年の値とした場合の試算値

初漁日、漁場

2025年の伊豆諸島海域におけるマサバ初漁日（漁期で初めてまとまった漁獲がある日）は、2月下旬以降となり近年で最も遅くなる可能性がある。なお、漁場は北部海域（大島千波・利島周辺）に形成される見込みである。これは、2024年12月時点における各地のマサバ水揚げ状況、東北海域の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均、FRA-ROMS IIで示された海況をもとに推定した結果である。

2016～2022年の初漁日は1月下旬～2月上旬であったが、黒潮続流が北偏し東北海域の水温が上昇した2023年と2024年は南下が遅れ、いずれも2月中旬が初漁となった（表2）。2025年は、12月時点の東北海域の水温が前年を上回る高温であることに加え、1月中旬まで黒潮続流の北偏が継続する見通しであることから、回遊の遅れが一層顕著になると推定される。

マサバの南下については2つのグループに分けて考えた。1つ目は、常磐北部で漁獲されている尾叉長27～30cm主体の魚群である。このうち明け3歳魚の一部が成熟に伴い南下すると考えられる。常磐北部は2024年12月時点で主漁場であり、銚子漁港では月間3,000トン程度が水揚げされているが、2023年の同時期は犬吠埼沖が主漁場であったことから、2024年は南下が遅れていることが伺える。2つ目は、宮城県女川定置網で12月23日に35トンの水揚げが確認された南下群と思われる成魚の魚群（尾叉長31～35cm主体）であ

る。これらの水揚げは例年よりも遅く、南下の遅れが明らかである。

また、例年12月から1月にマサバが水揚げされる千葉県外房海域（定置網・ハイカラ釣り・調査船）では、1月9日時点でも南下群と考えられる魚体が確認されていない。このことも、南下が例年より遅れていることを示している。

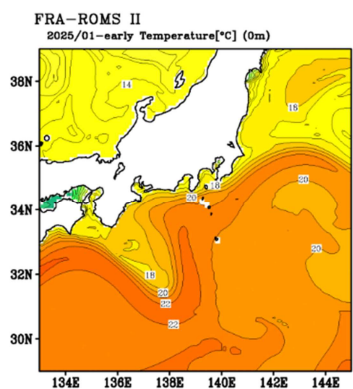
なお、マサバの伊豆諸島海域への来遊は、大型の魚群が先行し、小型の魚群が遅れて来遊することが知られている。しかし、12月時点の分布を見ると、小型の魚群（常磐北部）が大型の魚群（女川定置網）よりも南部に位置している。このため、2025年は例外的に先に小型の魚群が漁獲され、その後に大型の魚群が漁獲される可能性がある。

1～2月の伊豆諸島海域では黒潮が沿岸寄りを流れ、2月上旬までは北部海域でも20℃を超える水温が予測されている（図1）。しかし、2月中旬～下旬は北部海域に18℃の等温線が近づくとみられ、マサバはこの付近へ集群すると考えられる。また、3月以降も黒潮流路はA型基調で推移し、水温はやや高め～極めて高めで推移すると予測されている（令和6年度第2回太平洋いわし類、マアジ、さば類長期漁海況予報会議）。このことから、比較的水温が低い北部海域で漁場が形成され続ける可能性が高い。

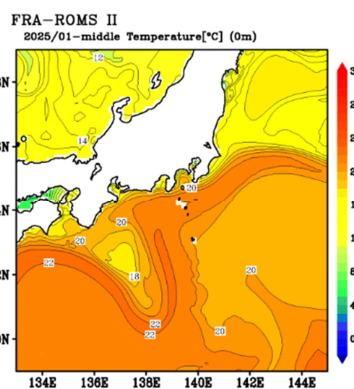
表2 マサバ初漁日の漁場及び水温

	初漁日	漁場	漁場水温(°C)
2015年	2月1日	三本	18.2
2016年	1月28日	三本	19.1
2017年	2月4日	三本	16.0
2018年	1月27日	三本	18.7
2019年	1月24日	利島	19.6
2020年	1月22日	利島	19.0
2021年	1月31日	大室出し	19.2
2022年	1月30日	利島	19.6
2023年	2月12日	利島	18.2
2024年	2月18日	大島千波	18.5

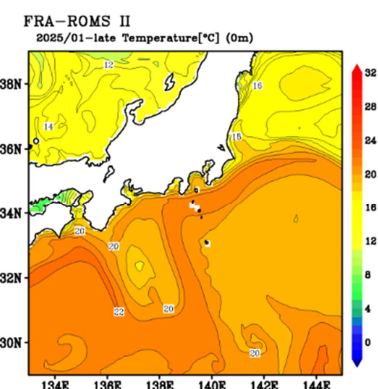
1月上旬



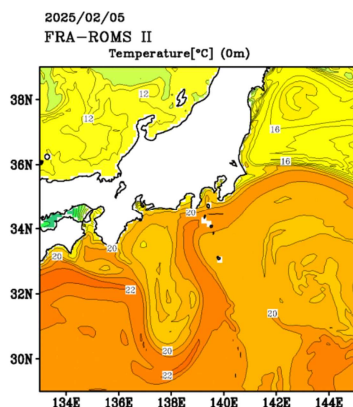
1月中旬



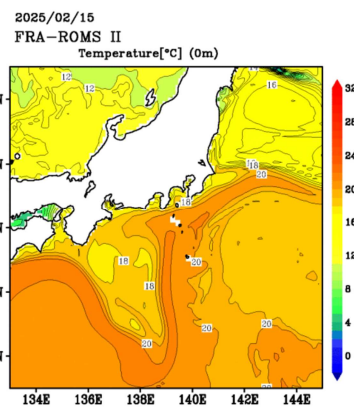
1月下旬



2月上旬



2月中旬



2月下旬

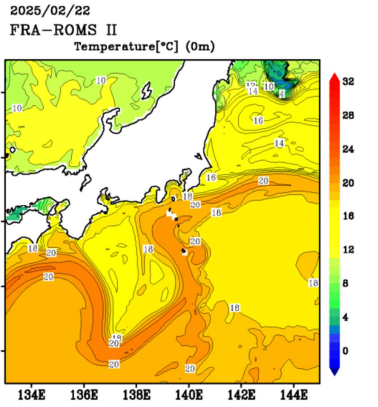


図1 FRA-ROMS IIによる2025年1～2月の表面水温

魚体

伊豆諸島海域で漁獲されるマサバは、3歳魚（尾叉長 27～30cm）が主体となり、4歳以上（31～35cm）が混じると予測される。この予測は、12月時点の主漁場である常磐北部の魚群を主体とし、12月23日に女川定置網で水揚げされた南下群と思われる成魚の魚群が合流する可能性を考慮して導いたものである。

12月1日に常磐北部で操業された北部まき網の漁獲では、27～30cmの2歳魚（明け3歳魚）が主体であった。一方、12月23日の女川定置網で水揚げされたマサバは31～35cmが主体であり、銚子漁港で得られたマサバの年齢査定結果との比較から、3歳魚（明け4歳魚）が中心と推定される（図2、表3）。なお、女川定置網で確認されたような南下群と思われる成魚の魚群は、現時点でほとんど確認されていないことから、主体は常磐北部の小型の魚群になると考えられる。

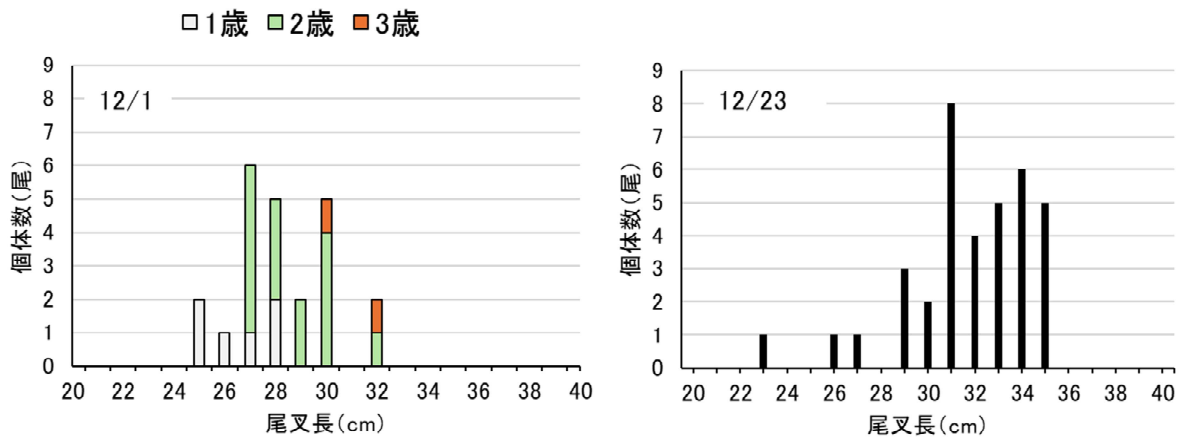


図2 常磐北部まき網（左）及び女川定置網（右：宮城県水産技術総合センター提供）で漁獲されたマサバの尾叉長組成

表3 銚子漁港で水揚げされたマサバの尾叉長別年齢組成（7～12月）

尾叉長	0歳魚	1歳魚	2歳魚	3歳魚	4歳魚	5歳魚	6歳魚
22		1					
23		7					
24		11					
25		18	1				
26		10	7				
27		6	22	1			
28		9	29	2			
29		6	28	3	1		
30		4	20	13	1		
31			6	8			
32			5	3	2		
33				1	2		
34				1	1		
35						1	
36							
37					1		
38							3

北上期

マサバが伊豆諸島海域から北上を開始する時期は、2024年と同様に3月下旬頃になると推測する。

マサバは20℃以上の暖水が波及すると北上を開始する傾向があり、今年も伊豆諸島海域で黒潮が沿岸に接近し、高水温が継続する見込みであるため、北上開始時期は前年と同様に通常より早まる可能性がある。

なお、伊豆諸島海域で産卵を終えたマサバは離散する一方で、熊野灘など伊豆諸島より西方の海域へ回遊した大型魚が、5月以降に再び伊豆諸島海域へ来遊する可能性がある。

【マサバ予測の考え方】

漁期当初のマサバ推定来遊資源量

昨年6月末時点のマサバ資源尾数から、7～12月の漁獲尾数及び自然死亡尾数を減じた尾数を年末時のマサバ資源尾数とする（水研機構データ）。これに、各年齢の平均体重を乗じた量を資源量とする。そのうち、4歳魚以上と3歳魚の一部を産卵親魚と考える。

漁獲量

漁獲割合（親魚量に対する漁獲量の比率）は、2000年代前半は0.05%以下で推移していた。2011年以降の漁獲割合は0.15～0.91%の間で推移しており、直近5か年（2020～2024年）の平均漁獲割合は0.37%である。

初漁日、漁場

- ・ 漁期初めの1～2月におけるマサバの集群は黒潮系暖水の影響下（16℃以上）の瀬にみられ漁場が形成される。【過去10か年（2015～2024年）の初漁時の漁場水温は16.0～19.6℃（平均18.6℃）】
- ・ 2012年までは、漁期初め（産卵期前、1、2月）の漁場は、ほとんどがひょうたん瀬～大室出しであった。【2013～2015年は北部海域が低水温となり、三宅島周辺海域で初漁がみられた。産卵盛期には、三宅島周辺海域に漁場が形成されることが多い。】
- ・ 親魚量が増加傾向にある2016年漁期には、初期漁場は三宅島周辺海域、盛漁期には銭洲海域にも形成された。過去の親魚量高水準期にも同様の傾向が見られた。
- ・ 漁期後半は、北部海域が主漁場となる。【ただし、北部海域が継続して冷水域に覆われると、三宅島周辺海域で漁場形成が継続する。】
- ・ 犬吠埼以北の水温が高いと南下しない場合がある。【2008年漁期は1、2月に常盤海域～鹿島灘に暖水が波及していたため、南下しなかった。】
- ・ 2019年以降の初期漁場は北部海域の利島もしくは大室出しで漁場形成されている。2017年からの黒潮大蛇行期以降、黒潮が銭洲～三宅島周辺海域を通過することが多くなり、漁期初めには、北部海域に適水温帯が形成されることが多くなった。

漁況

中熟期は水温が16℃を超える暖水が波及する瀬に、産卵盛期には18～20℃の暖水が波及する瀬に集群して、好漁となる。

魚体

漁獲物の体長組成から、大型個体が小型個体より先に来遊する。なお、熊野灘など伊豆諸島より西方の海域へ回遊した大型個体が、5月以降に再び伊豆諸島海域へ来遊する場合があります。漁期終盤には大型個体の割合が増える。

北上期

伊豆諸島海域の水温が20℃以上に昇温するとマサバは北上を開始し、漁場が消滅する。通常5、6月の伊豆列島線上における黒潮流軸の水温は22℃から25℃に昇温するため漁場は消滅する。ただし、当海域が冷水渦に覆われる場合は漁場が継続することがある（例：2007年漁期）。

その他

予報及び漁況経過における前年比の目安は表4のとおりとする。

表4 資源（親魚）量、来遊量及び漁獲量の評価の目安

予報	前年比	漁況経過	前年比
前年を下回る	-20%以下	前年を大きく下回る	-20%以下
前年並	-20%より大きく+20%未満	前年を下回る	-20%より大きく-10%以下
前年を上回る	+20%以上	前年並	-10%より大きく+10%未満
		前年を上回る	+10%以上+20%未満
		前年を大きく上回る	+20%以上

【マサバ資源管理】

1990年頃から低迷が続いていたマサバ太平洋系群の資源量は、2013年級群の高い加入量により、資源量・親魚量ともに増加傾向が続いていたが、近年の不漁を踏まえ評価が見直された結果、資源量および親魚量は大幅に下方修正された。

2024年度の資源評価（暫定値）によれば、2023年の親魚量は14.4万トンと目標管理基準値案（62.6万トン）を大きく下回り、漁獲圧も過剰と判断された。今後、安定的に親魚量を維持・増大させ、加入量の安定を図るには、未成魚の保護をはじめとする管理措置を継続的に実施することが重要である。

②ゴマサバ

【予測（2025年1～6月）】

(ア) 来遊量と漁獲量

前年並～下回る。

(イ) 漁期・漁場

漁期を通して、伊豆諸島北部海域（大島千波・利島等）に漁場が形成される。

(ウ) 魚体

32cm以上の3歳（2022年級群）以上が主体となる。

※年齢は年初に加齢し2025年1月時点で表す。魚体は尾叉長で表す。

【説明】

来遊量と漁獲量

図3からは2025年1～6月の棒受網CPUEは2024年1～6月を上回ると考えられる。しかし、2023年からは棒受網操業が著しく減少しており、7～11月の来遊量を反映できていないと考えられる。また、2024年7～11月の棒受網・たもすくい漁の漁況経過が芳しくなかったため、前年並～下回ると考えられる。

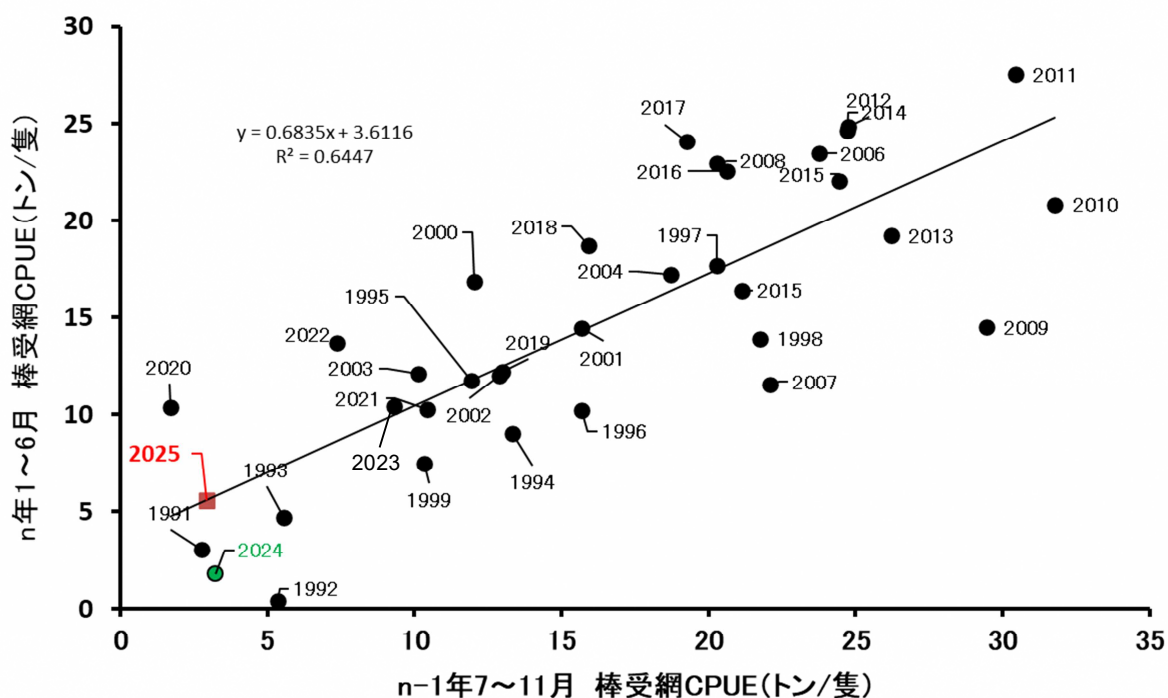


図3 (n-1)年7～11月の棒受網CPUEとn年1～6月の棒受網CPUEとの関係
* 図中の数字は年を示す。

漁期・漁場

2025年1月以降も黒潮大蛇行が継続することに加え、黒潮統流の顕著な北偏が継続していることから予測した。

魚体

2023、2024年は北部海域である大島千波や利島での操業がほとんどを占めている。かつて三宅島周辺海域で漁獲されていた個体よりも大きいため、直近2年の1～6月の漁獲物の尾叉長組成から判断した。また、年齢に関しては最近5年のAge-Length-Keyの平均から判断した。

2 経過と現況(2024年7月以降)

(1) 海況

黒潮は期間を通じA型で推移した。蛇行最南下部から伊豆諸島の西側を北上した後、向きを北東～東に変え三宅島～御蔵島付近を通過することが多かったが、9月中旬～10月上旬には、一時的に八丈島から三宅島付近を北上した。これに伴い、同時期に、北部海域では黒潮からの暖水波及がやや弱まった。房総沖の黒潮は接岸傾向で推移したが、7月下旬～8月中旬に、一時的にやや離岸した。

1月7日現在、黒潮は遠州灘沖をS字状に北上した後、東進し、銭洲付近や三宅島付近を通過した後に向きを北東に変え房総沖へ流れている。漁場水温は、伊豆諸島北部海域は20～21℃、三宅島周辺及び銭洲周辺海域は21℃になっている。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業

北部まき網による7～11月のさば類水揚量は14,650 t (昨年同期11,276t)であった。そのうち銚子漁港のさば類水揚量は3,104t (昨年同期6,850t)で、標本重量比から推定した水揚量は、マサバが2,443t、ゴマサバが661t (昨年同期マサバ：6,395t、ゴマサバ：455t)であった。なお、水揚量は12月末時点でも散発的であり、昨年同様に低水準である。11月下旬以降の1投網あたりの平均漁獲量は20.2t (前年同期：11月下旬～12月中旬；13.1t)であった。銚子漁港におけるまき網漁獲物のマサバ・ゴマサバ重量比率は、2024年1月から6月まではマサバが87%、7月から11月までは79%であった。

漁場は、7～11月中旬は主に三陸北部海域で形成された。11月下旬以降、常磐北部が中心となり、12月下旬まで継続している。12月下旬時点で本格的な南下群を対象にした操業にはならず、銚子港への1日3,000トンを超える水揚げはなかった。北部まき網全体でも1日3,000トンを超える水揚げはなかった。

2024年12月の緯度経度5分ごとで集計した漁場水温の平均は20.2℃ (前年：18.4℃、2019～2023年平均：16.1℃)であった。

北部まき網で2024年11月に漁獲されたマサバは、24～28cmの明け2歳魚(2023年級

群)～明け3歳魚(2022年級群)が主体であった。12月は27～30cmが主体であり、例年では南下群の主体となる大型個体は漁獲されなかった。

年明け後は1月5日の晩から操業が始まった。漁場は鹿島灘沖で、漁獲の主対象はマイワシでさば類の漁獲は確認されなかった。

(イ) 沿岸さば釣り

神奈川県内主要3港(松輪、三崎、長井)における一本釣りによるマサバの漁獲量は、7～11月で7.3トン(前年6.8トン、過去5年平均17.2トン)であった。月別に見ると、マサバは9月、10月と漁獲のピークが遅れて現れたが好漁には程遠く、ゴマサバは10月にやや上向いたものの全体として非常に低調で推移した。

千葉県外房海域のハイカラ釣りは、前年と同様に12月は出漁していない。

(ウ) 定置網

(神奈川県担当箇所)神奈川県内主要4港(三崎、長井、佐島、真鶴)の定置網によるマサバ漁獲量は、7～11月で108トン(前年167トン、過去5年平均303トン)であった。ゴマサバ漁獲量は76トンであった。月別に見ると、マサバは7、8月に若干漁が上向き、伊豆諸島海域からの来遊があったことを伺わせたが、それ以降は極めて低調で、前年、平年を下回る漁獲となった。ゴマサバも同様に、7月には上半期の6月に次ぐ漁獲量となったが多くはなく、その後も減少して近年では好調だった前年、平年に比べて低調な漁獲となった。

千葉県の外房沿岸の定置網では、10～12月にかけてサバナゴ銘柄の水揚げはあるものの、前年と同様に南下群と思われる大型個体の水揚げは見られなかった。

(エ) 静岡県棒受網・たもすくい

例年、当該期間の三宅島周辺海域における操業は棒受網が主体であるが、黒潮大蛇行による伊豆諸島周辺での黒潮流路の北偏により、伊豆諸島北部海域(以下、北部海域)の利島、大島千波等でゴマサバ漁場が形成されたことから、7月以降もたもすくいによる操業が行われた。

7月は北部海域の利島に漁場が形成され、CPUE(トン/隻)は上旬(6.9トン)、中旬(3.5トン)下旬(5.5トン)であった。8月上旬は、利島に漁場が形成され、棒受網とたもすくいの両方が行われた。CPUEは2.9トンであった。8月中、下旬はたもすくい操業のみが行われ、CPUEは中旬(0.3トン)、下旬(2.0トン)と低調な漁況であった。9月は利島および大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬(2.8トン)、中旬(0.8トン)、下旬(1.0トン)と低調な漁況であった。10月も引き続き利島および大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬(1.4トン)、中旬(0.1トン)、下旬(0.1トン)と極めて低調な漁況であった。11月上旬および中旬は利島および大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬(2.5トン)、中旬(0.6トン)と10月に続き極めて低調な漁況であった(下旬は操業なし)。12月も引き続き利島および大島千波に漁場が形成され、CPUEは上旬が3.9トンと好漁には程遠いもの

の、最近の中ではまとまった漁獲が見られた。しかし、中旬になると1.6トンと再び低調になり、2024年漁期はそのまま終漁となった。2024年7～12月における静岡県主要4港（沼津、小川、伊東、静浦）におけるさば類の水揚量は、ゴマサバ167トン（前年比：40%、平年（直近5年平均）比：22%）であった。CPUEは2.7トン（前年同期5.5トン）であった。マサバの水揚げはなかった。

漁獲されたゴマサバの尾叉長範囲は27～41cmであった。

静岡県船は1月10日現在、出漁していない。

（オ） たもすくい

2024年7月～12月に、千葉県の民間船によるたもすくい漁が行われた。いずれの月も漁獲は低調で、7月に27トン、9月に5トン、10月に14トン、11月に5トン、12月に18トンのゴマサバが水揚げされた。漁場は期を通して伊豆諸島北部海域（大島千波・利島）であった。

また2025年1月4日に千葉県民間船が利島（漁場水温19.9℃）でたもすくいを操業し、2トンのゴマサバを漁獲した。

3 漁期前調査結果

（ア） 千葉県

千葉県漁業調査船ふさみ丸は、2024年11月12日、12月23日に鴨川沖でハイカラ釣りによる調査を実施した。いずれもマサバが漁獲されたが、11月12日が22～28cm主体、12月23日が22～30cm主体と小型であり、南下群と思われるものでは無かった。

千葉県漁業調査船千葉丸は、2024年12月2日夜にたもすくいによる調査を行ったが、利島、大島千波で漁獲は皆無であった。

（イ） 神奈川県

神奈川県での調査は、伊豆諸島海域でのたもすくい船の操業が無くなってから実施してない。

（ウ） 静岡県

静岡県沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸による調査は、1月10日現在実施していない。